

〈博物館特別展〉

## 「鈴木大拙没後四十年記念展」に想う

教授 築山 修道  
(比較思想・国際文化学)

96年の生涯に亘って大乘仏教の精神を究明し、その真実を国内外の人々に宣揚し、そのことが世界の精神文化の創造と平和に寄与しうることを確信して、最後の最後まで働きに働き続けた鈴木大拙が示寂して40年になる。これを記念して昨年、先生と縁の深い鎌倉、金沢、京都の3ヶ所で、「鈴木大拙没後四十年記念展」が開催された。本記念展は、松ヶ岡文庫・鎌倉国宝館・金沢市立ふるさと偉人館・大谷大学・真宗大谷派の協同事業として実行委員会が組織され、朝日新聞社・岩波書店・春秋社などの後援をえて実施されたものである。3ヶ所で開催された展覧会は全体として本記念展の趣意を共有しながらも、それぞれが先生との固有な因縁に基づいて独自のテーマを挙げ、会場ごとに特色のある記念展となるように創意工夫がこらされた。そうした中で京都では、大谷大学博物館を会場として、10月10日から11月28日まで、大拙先生の生涯を通して、大谷大学との深い関わりを中心に、その人となりや学問を紹介し顕彰すべく「大拙 その人と学問」と銘打って展覧会が企画された。

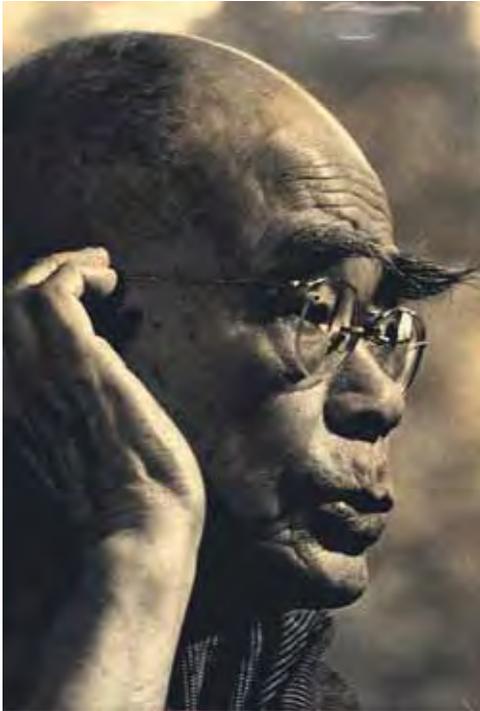
大谷大学における本特別記念展およびその他の関連諸事業が鈴木大拙を紹介し顕彰するのにどのような意義があったかについては今後の歴史的評価をまたねばならないであろう。そこで、ここでは本展の企画に多少とも参加し、本学博物館における種々の貴重な展示品を拝観したときの様子と、私がえた感想の幾分かを記述することにしたい。

まず、本学における展覧会を拝観して印象深く思われたことは、大拙の人と学問の全体

像を鳥瞰しうるような構成となっていたこと、そして一点一点大変見応えのある展示品が多かったという点である。またそれに加えて、本展は大拙没後四十年にして開催された初めての本格的な展覧会であり、その点においても大きな意義があったと思われる。

全体の展示は3部構成となっていた。第1部は「学の胎動」というセクションで、そこは二つの展示群に大別されていた。一つは、大拙を育んだ家族・風土、そこで彼が出会った人々との交流を物語る、青年期に至るまでのいわば「鈴木貞太郎」を知るうえで貴重な資料や写真が展示されていた。例えば、石川県専門学校時代の同僚でその後も大拙が生涯に亘って親交を続けた山本良吉宛の書状(全9通)、四高以来の終生の心友西田幾多郎の扁額書「自安堂」と両者の合筆書、松ヶ岡文庫の創設など大拙の経済的支援者であった安宅弥吉の写真、および京都学派を形成する西田と彼の高弟たちと一緒に撮った写真などである。また、私の目を惹いたのは、大拙が父良準から授かって生涯大切に保管していたと思われる『衛生十二字歌』、『修身十二字歌』、『西洋三字経』などで、これらは鈴木家における当時の教育的背景を窺いうる興味深い資料である。そして明治18年、貞太郎が同僚の藤岡作太郎らと創刊した文学雑誌『明治余滴』も貴重な物であろう。

本セクションのもう一つの主要な展示群は、一言でいえば、「貞太郎」が「大拙」となり、その生涯の地歩を確立するまでの約20年間である。つまり、円覚寺における参禅から、12年間の米国ラサール・オープンコート



鈴木大拙

社のポール・ケーラスの許における渡米生活の事情や心情を認めた山本良吉および釈宗演宛の書状、その当時の写真など、いわば大拙の修業時代ないし自己形成のドキュメントと、鎌倉禅文化の至宝を紹介する数々の展示物である。本展において、大拙と鎌倉禅文化のこのような相映が展覧されたことには格別な意味があるように思われる。つまり、大拙という存在は禅文化をその歴史的・精神的深大な背景として誕生したと同時に、その大拙自身がいまや禅文化の伝統の重要な一角を担っていることを拝観者に刻印し認知せしめるからである。例えばそこには、重文『新編仏法大明録』、『臨濟録抄』(五逆人聞雷)、夢窓国師像、誠拙周栲像、仙厓、盤珪、洪川、宗演などの墨跡、そして大拙が生涯唯一の師と仰いだ釈宗演から授かった居士号「大拙」の揮毫、さらには渡米生活中の様子を窺いうる貴重な写真群が展覧されていた。

第2部は、「学の大成」と題し、1921年以降

約40年間に亙る大拙と大谷大学および真宗との関わりを中心に、人間大拙の一面をよく窺い知るピアトリス夫人との愛情に支えられた親交と結婚生活および学究生活の風光、さらには大拙その人自身を如実に物語る異彩を放つ数点の墨書などが展示されていた。例えば、本コーナーには、大谷大学第3代学長佐々木月樵の大拙宛の書状、鈴木大拙・ピアトリス夫人に対する「採用認可状」および「辞令」(任真宗大谷大学教授)、両人の日記と書簡類、「文学博士学位授与認可状」、大拙単独の墨書数点のほか金子大栄・鈴木大拙・曾我量深合筆墨跡など大変貴重な展示品が見られた。そうした展示物と並んで、私の関心を惹起したものは『イースタン・ブディスト』創刊号と御進講『仏教の大意』の「草案」とその「清書」(毛筆書)、『浄土系思想論』などである。そして最も注目されたものは、やはり、『教行信証』の英訳作業の過程をよく窺いうる序文・信巻・証巻の「自筆原稿」とその校正入り「ラフ・ドラフト」であった。

第3部は「学の発信」と冠するセクションで、そこには大拙の生涯に亙る偉大な研究業績を証示する珠玉の数々が展覧されていた。例えば、初期の『新宗教論』、英訳『大乘起信論』、英文『大乘仏教概論』、邦訳スエーデンボルグの『天界と地獄』および『神智と神愛』、『禅の研究』、英文『禅論文集』第1巻、英文『楞伽經の研究』、英訳『梵文楞伽經』、英文『禅と日本文化』およびその邦訳、『盤珪の不生禅』、さらには大拙の名声を一躍高めた『日本的靈性』など。そしてそれらはほとんどが初版本であり、また大拙自身が手元において使用していた愛用本も数点あった。

本特別記念展は、実行委員各位の尽力は言うまでもなく、その他関係各位の多大なご支援とご協力をえてはじめて実現したものである。そのことに思いをいたすとき、ここに衷心より深謝申し上げずにはおられない。そして開催期間中に、4000名近い多数の人々が観

覧に訪れてくださったということは、やはり、鈴木大拙という人物とその業績の偉大さを物語るものであり、改めてその存在感と影響力の大きさを再確認せしめられた次第である。

最後に、本記念展に格別なご協力をいただいた岡村美穂子さんのことについて一言触れておきたい。岡村さんは大拙先生の最晩15年間ほど先生に仕えられ、身边のお世話や秘書の仕事をされた方である。その岡村さんが生前先生から授かった書と遺品を、本展の開催に合わせて、特別出陳することを承諾しご協力くださったのである。それらは墨書12点と遺品7点であるが、いずれも貴重で興味深いものばかりであった。例えば、「妙用」、「O Wonderful!」、「それはそれとして」、「常行直心」、「無事」などの墨書と「念持仏」(地藏と文殊)、「念珠」、先生愛用の「双眼鏡」と「万年筆」(モンブラン)等々である。ここに心底よりお礼申し上げたい。



岡村美穂子氏所蔵資料の特別陳列 (図書館)